

大政奉還後の政治状況と諸藩の動向

青山 忠 正

〔抄 録〕

慶応三年（一八六七）十月十四日、將軍徳川慶喜は、土佐藩の建白に応じて、朝廷に「政権」奉還の上表を呈し、朝廷は翌十五日、これを許可した。上表提出に先立つ十三日、慶喜は在京四十藩の重臣、約五十名を二条城に呼び集め、「政権」奉還の構想を公表し、彼らから意見を徴していた。

これらの事実、すでに周知の事柄であるが、本稿では、佛教大学附属図書館所蔵『新発田藩 京都留守居役 寺田家文書』のうちから、とくに『諸家様廻章留』及び『窪田平兵衛上京一件』

を通じて、大政奉還から王政復古に至る時期の政治状況ならびに諸藩側の立場に立った政治動向を概観する。十月十三日、諸藩重臣の二条城参集において、新発田藩からは京都留守居役寺田喜三郎が参加した。当事者の自筆記録を紹介するのは、本稿が初めてであろう。

キーワード 大政奉還、新発田藩、京都留守居、王政復古

はしがき

慶応三年（一八六七）十月十四日、將軍徳川慶喜は、朝廷にあて、「政権を帰し奉り」とする上表を呈し、翌十五日、天皇（睦仁）は、これを聴許した。いわゆる大政奉還である。上表提出の前日、慶喜は、在京四十藩の重臣・留守居を二条城に召集し、「政権」奉還について、

その意思を表明するとともに、意見を徴していた。

その後、十二月九日、薩摩藩を中心とする勢力により、「王政復古」政変が引き起こされるまでの経過について、薩摩・長州・土佐など、これに直接関わった諸藩の動向に関しては、既に多くの事実が明らかにされている¹。しかし、その一方、政局を主導する立場になかった他の多くの諸藩に関しては、これまでの研究においても、ほとんど触れ

られることがなかった。

本稿では、このような研究状況を踏まえ、とくに越後新発田藩を事例に、京都留守居役の寺田喜三郎や、当主名代として江戸から上京した家老窪田平兵衛らの活動に焦点を当てて、その動きを検討し、合わせて史料紹介の意味を持たせることにしたい。

当該期の政治状況は、ややもすれば、薩長と幕府の抗争のみに絞って理解されがちであるが、その基底には、薩摩・長州・土佐・越前各藩などの、いわば当事者以外に、多くの在京諸藩が、情報収集活動を行ない、多数意見を形成して、政局の進むべき方向を制約していた。その意味からすれば、本稿の検討は、当該期の政治史を、より豊かで具体的な内容において理解する糸口となるだろう。なお、新発田藩を事例としたのは、佛教大学附属図書館に、『新発田藩 京都留守居役寺田家文書』が、まとまって所蔵されており、^②格好の素材を提供していることが直接のきっかけである。

一 諸藩重臣の二条城招集

よく知られているように、慶応三年十月三日、土佐藩隠居、山内容堂からの建白に応じて、將軍慶喜は、十四日に「政権」奉還の上表を呈するに至るのだが、その前日、在京十萬石以上の諸藩重臣または留守居を二条城に召集した。新発田藩京都留守居役寺田喜三郎は、その召命に応じて登城する。この経過について、喜三郎は、寺田家文書所収『諸家様廻章留』（調査番号166）に、次のように記している。

十月十一日夜八ツ時

設楽岩次郎様

戸川伊豆守様 より

津軽越中守殿御留守居より御廻状之處、丹羽様衆より相廻り、即左之通、

国家之大事、見込御尋之儀有之候間、詰合之重役、明後十三日九ツ時、二条御城へ可罷出候、尤重役詰合無之向者、国事ニ携候者可罷出候、此段可達候、以上

十月十一日

設楽岩次郎様

戸川伊豆守様

津軽越中守殿留守居

丹羽左京大夫殿留守居

伊達遠江守殿留守居

松平肥前守殿留守居

松平飛騨守殿留守居

御 御達之趣意、得其意候、寺田喜三郎

追啓 披見之上、早々順達、留より御徒目付当番所へ可被相返候、以上

このように、十月十一日付、徳川家目付設楽岩次郎、大目付戸川忠愛を発給元とする廻状が、弘前藩（津軽家）留守居を触頭とする廻状順達の組織によって、二本松藩（丹羽家）から、新発田藩寺田喜三郎のもとに回ってきた。その内容は、「国家の大事」について、見込みを尋ねたいことがあるので、十三日正午に二条城へ出頭せよ、というものである。喜三郎は、この廻状書面に、了解した旨を記入したうえ、おそらく、「御徒目付当番所」へ返却したと思われる。

なお、『諸家様廻章留』に、これに直接続く記事はない。その続きは、『慶応三卯年 十月より十二月迄 廻章帳洩之分留帳 新発田御留守居方』と題された別帳に仕立てられて、『諸家様廻章留』の後半に綴じ込まれている。以下では、この記録を『廻章帳洩之分留帳』と略記する。それは、次の記事から始まる。

一、十月十二日、大目付様、御目付様より御呼出、御廻章到来、十三日巳之刻、御城入之次第

大広間へ一同相詰候処、大目付戸川伊豆守様より見込御尋之義ニ付、御書附御渡相成候間承知可致旨御達、引続、伊賀守様御襖際へ御出座、御尋之義ニ付、御書付三通相渡候間、見込之趣、無伏臆可申上、御直ニ御聞被遊候旨、御達相成、戸川様、設楽様より御書付御渡相成、見込申上度者は居残、追而申上候者へ姓名書、指出候様御達之事

これによると、廻状到来が、十二日であったことが確認できる。廻状順達の順番は、おそらく新発田藩が最後で、十一日中には回らなかったであろう。十三日当日、定刻より一刻早めに二条城に入った喜三郎は、一同と共に二ノ丸大広間に詰めた。まず、大目付戸川忠愛から、見込みお尋ねのため、書付が渡されとの達しがあり、ついで、老中板倉勝静が出座し、書付三通を渡すので、見込みの廉を腹藏なく申し上げよ、將軍が直々にお聞き遊ばされる、と言った。戸川、設楽が、その書付を配布し、見込みを申し上げたいものは居残るように、と指示した。書付「三通」が、それぞれ、どの書類にあたるのか、直接の説明が記されていないが、最も主要なものは、当然とはいえ、慶

喜の「政権」奉還上表の案文である。それは、『廻章帳洩之分留帳』に、次のように記載され、続いて、召集に応じた諸侯（代理）名、ならびに居残つて慶喜に面会したものの氏名が記されている。

我、皇国時運之沿革を觀るニ、昔王綱、紐を解て相家権を執り、保平之乱、政権、武門に移てより我祖宗に至り、更に龍脊を蒙り二百余年子孫相受、我其職を奉すと雖も政刑当を失う不少、今日之形勢に至り候も畢竟薄徳之所致、不堪慚懼候、況哉当今外国之交際、日ニ盛なるニより、愈朝権一途ニ不出候而ハ綱紀難立候間、從來之旧習を改め、政権を朝廷に歸し、広く天下之大議を尽し、聖断を仰き、同心協力、共に皇国を保護せば必ず海外万国と可並立、我国家に所尽ニ^{（イマ）}不過之候、乍去、猶見込之義も有之候は、聊忌諱を不憚、可申聞候

十月

南部侯 佐竹侯 越前侯 備前侯 土佐侯 柳川侯 大和侯 薩州侯 芸州侯 雲州侯 津輕侯 二本松侯 鍋島侯 大聖寺侯 富山侯 小倉侯 中津侯 郡山侯 阿部主計頭様 御 大垣侯 真田侯 松平伊予守様 尾州侯 能州侯 彦根侯 高松侯 忍侯 姫路侯 高田侯 加州侯 酒井左衛門尉様 阿州侯 筑前侯 仙台侯 作州様 因州侯 細川侯 津侯 上杉侯 久留米侯 伊達侯

居残之分

薩州 小松帶刀 芸州 辻将曹 備前 牧野権六郎
土州 福岡藤二郎 伊達 都築莊藏

右、喜三郎相勤之

記事の最後に、「右、喜三郎相勤之」とある。その場に列席した諸藩側の当事者が、直接に、その状況を書き留めた記録として、この史料は、稀有のものであり、同様な事例はこれまでに報告されていない。むろん、内容自体は、『徳川慶喜公伝4』（平凡社東洋文庫、一九六八年復刻、六二頁）、あるいは『明治天皇紀』第一（吉川弘文館、一九六八年、五二七頁）などにより、周知のもので、とくに前者では、諸藩側の出席者の氏名・人数も判明する。ただし、会津藩が出席したかどうかなど、細かな点では異動があり、今後の精査を要する点も残る。なお、さらに補足しておけば、この場で披露された「政権」奉還上表の案文についても、『徳川慶喜公伝4』では、「回覧せしむ」とあり、喜三郎が、書付が渡されたとしていることは食い違いがある。案文の内容も、『慶喜公伝』がいうように、「上表と同文にて、唯前後の体裁を異にするのみ」ではあるが、喜三郎の留帳で、「広く天下之大議を尽し」とあるのは、「公議」のほずであり、留帳作成時の誤写と思われるが、注意しておきたい点である。

この見込み御尋ねを経たのち、慶喜は、翌十四日、朝廷宛て上表を呈し、十五日にそれが聴許されるが、その経過は周知の通りなので、ここでの叙述は省略する。

その時、朝廷は沙汰書を慶喜に降し、「大事件外異一条者、尽衆議、其外諸大名伺、被仰出等者朝廷於両役取扱、自余之儀者、召之諸侯上京之上、御決定可有之、夫迄之処徳川支配地、市中取締等者、先是迄

之通二而追而可及御沙汰候事」と命じ、あわせて十万石以上の諸侯に上京を命じた（前掲『明治天皇紀』第一、五二九頁）。

新発田藩にとって重要なのは、もとより、十万石以上の諸侯の一人として上京が命じられたことであり、すぐに対策が講じられることになるのだが、その点は次節にゆずり、右の沙汰書への対応について見ておきたい。

この沙汰書に対して、翌十六日に徳川慶喜が質問状を呈した。すなわち、『尽衆議』といったことが、具体的に何を意味するのか、などを朝廷に質したのである。これに応じて、朝廷は十七日、下げ札を以て回答したのだが、そのやり取りは、三日後には廻状を以て、諸藩側に伝達されている。すなわち、『諸家様廻章留』本冊に、次のようにある。なお、「下札」のカギカッコは引用者による。

十月二十日夜、備前様衆より之御廻状并別紙、式通、鍋島様衆より到来、写取、亀井様衆へ相廻申候

十月二十日 松平備前守留^(マ) 沢井宗兵衛

廻状如同断

松平陸奥守様留守居中様	立花飛驒守様
松平修理大夫様	丹羽左京大夫様
松平肥前守様	亀井隠岐守様
御	島津淡路守様

去ル十七日、別紙之通、御所へ被仰立候処、下ケ札之通、被仰出

候、此段、相達候

十月二十日

ズ

一、昨十五日被仰出候御別紙之内、尽衆議と之御文言、召之衆、諸侯上京之上、公議を被為尽、差掛候儀者詰合諸侯、諸藩士等二会議、被仰付候儀ニ御座候哉

「下札」書面之通

諸大名伺、被仰出候等者於兩役取扱候と之御文言

諸侯より御兩卿へ伺差出候節者、衆議を被為尽、御決定之上、

御兩役を以被仰出候儀に御座候哉

「下札」尤、於重事者尽衆議候上、取扱之事、尋常小事者直ニ取扱之事

支配地と之御文言

山城国其他御領所之儀ニ御座候哉、又者徳川領地を被仰候儀ニ

御座候哉

「下札」支配地之儀者、禁裏御領所之儀ニ候

十月十七日

ズ

この慶喜の質問と、朝廷側回答についても、『明治天皇紀』第一、に記載があり、改めて紹介するまでもないのだが、諸藩側に公式に伝達されていたことは、知られていないようである。また、新発田藩の視点から見ると、廻状順達の組織と順番が、先の十月十三日二条城召集の際のそれと異なっていることが明らかだが、その理由などについて

ては未詳である。ともあれ、ここでは、十五日の朝廷からの沙汰に関する質疑応答を、徳川家が、周知徹底させようとしていた事実を確認しておきたい。

二 寺田惣次郎の先発

当主上京の朝命を受けた新発田藩では、それらの報告のため、寺田喜三郎と中川環が急ぎ、江戸に下ることになった。京都出立の日付は、確認できないが、遅くとも十月二十四日までは江戸邸に到着している。この後の記録は、『慶応三卯年 窪田平兵衛殿、為御名代上京ニ付、右差添、先登被仰付一件 取計留帳 十月 寺田惣次郎』（調査番号261）に、筆者の寺田惣次郎が詳しく書き留めている。以下、この史料を『窪田平兵衛上京一件』と略記する。

新発田藩溝口家の江戸邸では対応を協議した結果、当主の溝口誠之進（直正）が、八月に家督を継いだばかりで、しかもまだ幼年であることを理由に、家老窪田平兵衛が名代として上京することを決した。さらに窪田の上京に先立ち、先発として、寺田惣次郎（溝口家公儀人）が、十月二十九日に江戸を出立、十一月十日に着京した。なお、寺田喜三郎と中川は、二十六日江戸発、十一月初めには京都に戻り、惣次郎の到着を鴨川東側の蹴上^{けあがり}まで出迎えている。なお、同苗とはいえ、二人の間に直接の血縁関係はない。

寺田惣次郎先発の意味は、縁家の久世家や、摂政二条斉敬、伝奏飛鳥井雅典、同日野資宗はじめ公家関係者、また老中板倉勝静など、武

家側の関係先を回動して挨拶を行ない、とくに公家関係者に進物（現金）を贈ることである。その「付け届け」先は、伝奏の雑掌などにまで及ぶ。これらの措置を取っておかないと、情報収集活動などで、支障をきたすのであろう。寺田惣次郎は、そのための費用として、百五十両を渡されていたが、それでは不足し、十二月になって二百五十両を京都商人から借金する始末であった。

こうした公式的な根回し活動のほかに、水面下の情報収集も、寺田惣次郎は、喜三郎と共に当然ながら進めている。なかでも、注目されるのは、十一月二十五日付で、江戸邸宛に発した御用状である。『窪田平兵衛上京一件』同日条には次のように見える。

一、今日、六日限町便を以、左之御用書、差下候事

一筆致啓上候（挨拶文言略）

一、去ル二十二日御上京御断、御重役御差出被成度旨之御伺書、別紙之通、板倉伊賀守様へ差出、翌二十三日御呼出ニ付、喜三郎罷出候処、可為伺之通と以御付札、御差図相済申候、且又伝奏飛鳥井大納言様（雅典）へも同様之御伺、別紙之通、一昨二十三日差出候間、為御心得申入候

一、大宮御所御造立ニ付、国役金仕訳書、蒲原郡之分丈ケ納証文案、為御登、致落手候（中略）

一、去ル三日於其表、稲葉美濃守（老中正邦）様より御呼出、土手橋御門内、御人数出、御免、鍛冶橋御門内、御人数出、被蒙仰候由、当節、御府内不穩形勢ニも相聞、愈々御心配之義と存候

一、当地公武御折合等之義、段々周旋致候処、今度御政権奉還一条、

速ニ被聞召候旨、御沙汰等ハ、主上之思召より出候ニ者無之、薩藩始、外四藩之者、御所向切廻し全右五藩之所為ニ相聞、先般より多分人数も繰込居候処、猶又逐々相増、五藩出京之上ハ二条へ差廻候様之模様ニも相聞、何分諸説紛々之処、御徒目付大原道藏義、大坂市中為御取締、相詰居候ニ付、極密為聞合、去ル十九日、（山中）休助下坂為致、段々内密談之趣、別紙頭書差出、猶得と対談之模様柄、承候処、右五藩より可起事勢、もと英人と馴合、不容易謀計も有之、六七分迄暴動可相至見込相見、一体右申合之模様□源共符合致居、薩州御当主も去ル二十三日当地御着ニ相成、多分之御人数御召連、いづれも旅装ニ者無之、軍装ニて物具無之計、右五藩旅館へも長人者多分入込居候由ニ相聞、不容易形勢ニ候処、御名代御登と相成候上ハ出火并非常之節、天機御伺無之而者、不相成、自然御所御警衛等之御沙汰有之顕然ニ候処、御手勢のみニては甚手薄ニ相見、品々ニ付、御外聞ニも相拘り候而ハ如何ニ付、相当御人数為御登之方可然と及談合、平兵衛殿御行逢迄、飛脚差立、委細之模様、心付候処共申上置候、右御用書御旅中より多分其者へ御廻しニ可相成哉ニ付、江戸同役共へも御下ニ相成候様、被仰送候義申上候、定而此程ハ右御用書ニて御承知之義と存候

右条々之趣、御達如此御座候、御用部屋へも宜被仰上候様存候、恐惶謹言

十一月二十五日

寺田喜三郎
寺田惣次郎

鈴木弥五大夫殿
寺田与一郎殿

最初の簡条では、当主上京の命に対し、幼年のため、代わって重役が上京するという件について、老中板倉勝静に届け出たところ二十三日に許可された、伝奏飛鳥井雅典にも同様の旨を申し出ている、と知らせている。

重要なのは、第四の簡条である。今回の「政権奉還一条」が速やかに許可されたことは、「主上」の思召しからではなく、薩摩藩をはじめとする五藩（土佐・芸州・越前・尾張）が、朝廷に裏工作を行なった結果であるとしている。さらに、徳川家の御徒目付大原道藏なる者が大坂に詰めているので、山中休助を下坂、接触させ、情報収集にあたらせたところ、次のような情報を得た。すなわち、薩摩島津家当主茂久が多数の兵を率いて二十三日、着坂したこと、その人数はすべて軍装であり、旅装ではない（船で輸送された）、いづれ暴動に及ぶものと思われる。これらの重要情報を、上京の途上にある窪田平兵衛にも知らせるため、道中で行き合うところまで、別便の飛脚を出発させた。

これらを見ると、大政奉還から、その後にかけて展開する政局動向について、薩摩藩などが主導していることは、在坂・在京諸藩の間でも広く知れ渡っていたことが知れる。

三 平兵衛の上京と十二月九日政変

その窪田平兵衛は、十一月十六日、江戸を出立していた。旅程は十六泊の予定なので、先の飛脚が京都を発する二十五日ころは、ちょうど東海道の半ばくらいであろう。なお、供連れは総計六十六人に達する。十万石の大名の名代ともなれば、儀容を整える意味からも、それなりの人数が必要なのである。

途中、岡崎駅で、例の飛脚に行き合った平兵衛は十二月二日、京都に到着した。したがって、京都政局のあらましについては、すでに知識を得ていたわけである。滞在先は東堀川一条上ルの新発田藩京都邸である。平兵衛は、翌日には寺田惣次郎と喜三郎から、改めてこれまでの周旋経過について報告を受け、同時に廻勤の相手や、彼らに提供する進物としての金額などについて打ち合わせを行った。公家関係では、寺田惣次郎上京時の摂政及び伝奏二名だけでなく、議奏四名（定員五名のところ一名欠け）が加わっている。

ちなみに、この記録では「摂政」二条斉敬を、すべて「関白」と誤記している。そのうえで、十二月五日、窪田平兵衛は寺田惣次郎を同道して、「関白様」以下の邸を回り、「天機御伺并着京之挨拶」をして回った。

しかし、情勢の展開は、新発田藩側の予想を上回るほど速かった。すなわち、平兵衛着京の、ちょうど五日後、七日夜四ツ半時、つまり真夜中すぎに、伝奏雑掌から寺田喜三郎のもとに廻状が回されてきた。次のような内容である。

御用之儀有之候間、明八日午刻無遅々禁裡御所仮建へ重臣留守居家来之内詰合之者、参上可有之候、此段可相達旨両伝被申付候、以上

十二月七日 亥刻触出

両伝奏 雑掌

喜三郎は、これに应じて八日の刻限に御所に参殿したが、そこで議題とされたのは、長州藩を寛大処分に付す、具体的には毛利家当主父子の官位を復旧するという件であり、しかも即日、回答せよということであつた。

これは難題であり、実際に即答できるような問題ではない。そのため、衆議の場は混乱したようであり、喜三郎は御所内で徹夜する結果になった。彼が、引き取つたのは翌九日の夜が明けてからのことである。その時は、すでに政変が行われる直前であつた。その前後の様子は、『窪田平兵衛上京一件』同日条に、次のように記されている。

一、喜三郎儀、今朝五時過、御所より引取、見込御尋之次第、早速平兵衛殿へ申上、御請之儀者、幸今日二条へ御登城之儀ニ付、丹羽様衆と御商談之上、御取揃之方、可然と申談、尤見込言上延引可相成段ハ伝奏様へ喜三郎罷出、申上置候事

今朝、二条御城へ為窺御機嫌、平兵衛殿同道惣次郎、六半時、供揃ニ而五時過出宅、大手御門内ニ而喜三郎之印鑑差出、罷通、兼而相頼置候御小人目付出迎有之（後略）

一、今日、登城致居候処、四半時頃、会津侯、俄ニ御登城、即刻、御逢も有之様子候処、引続當中動揺いたし即刻御伴揃ニ而御下坂被

仰出候処、散兵大砲方歩兵等、追々御繰込、会桑御人数槍炮持参、御城中へ駈入、不容易變動之様子ニ付、退出後、及探索候処、今朝より薩芸土之三藩人数繰出し、御築地内外大小炮軍装ニ而嚴重相固居候由、表顯銘意ハ、此度長防寛大之御所置振ニ付、幕府ニおゐて承引有之間敷、自然如何之暴動も難計、御所辺御守衛いたし候様、大炊御門（右大臣家信）様より御達有御座、其実、右三藩之計略ニ而今朝堂上方御退出之虚へ人数繰込、太守方も引続御参内有之、会桑御両家御役御免、御警衛御持場等、速ニ繰替と相成、将又二条関白様始、堂上方二十六軒程御参内御差止と相成候由、二条御城之方ハ会桑御人数ニ而相固居不容易騷擾ニ相聞候事

一、右ニ付、平兵衛殿始、非常之御用意有之、拙者心付等も申上、夫々用意致居候事

一、御出入山田屋省一へ申付、町下座見老人も日々相雇、變動之模様、無昼夜、探索注進為致候事

この新発田藩側の記録によれば、政変は、薩芸土「三藩之計略」で、長州藩の寛大処分を決定するとともに、会津藩・桑名藩をそれぞれ、京都守護職・京都所司代から追放すべく引き起こされたものと、とらえられたようである。もとより、リアルタイムの記録であるため、事態の全容を把握することが不可能であつたことが、その書きぶりからうかがえる。今後、寺田家文書中からも、新たな関係史料を発掘すること、さらに分析を深められると予想する。

本稿は科学研究費助成事業（基盤研究C）課題番号25370805「京都留守居を通じた公武関係史の研究」（研究代表者青山忠正）による研究成果の一部である。

〔注〕

- （1）拙著『明治維新と国家形成』吉川弘文館、二〇〇〇年、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』吉川弘文館、二〇〇四年、拙著『明治維新の言語と史料』清文堂出版、二〇〇六年、など。
- （2）この点については、青山忠正・浅井良亮「新発田藩京都留守居寺田家と旧蔵文書」（本論集第4号、二〇一四年）を参照。

（あおやま ただまさ 歴史学科）

二〇一六年十一月十五日受理